

「はい」、「ええ」、「うん」の言語行動

東洋大学 三宅 和子

1. はじめに

「はい」、「ええ」、「うん」は、日本人の言語生活で日常的に使われる、最も基本的な語のひとつであるが、私たち自身はそれらをどのように使っているのかあまり自覚がない。日本語教科書では、これらを肯定応答詞やあいづち詞として扱うことが多いが、それでは実際の使用のほんの一部を説明したことにはならない。またこの3語の違いをフォーマリティや丁寧度の差であるとする説明も言語行動の実態調査や分析に支えられた見解とはいえない。

これらの語は日常的な会話に頻繁に使われ、意味機能が多様であるにもかかわらず、それが意識されていないため、日本語教育では十分に教えられないまま、自然習得に任されている状態である。しかし、上級レベルになっても日本人との円滑なコミュニケーションができない原因のひとつとして、会話上でさまざまな働きをするディスコース・マーカ―(談話標識)の適切な使い方が未習得であることが考えられる。これらの語のもつ根源的な機能と、そこから拡張したさまざまな使われ方を整理することは、学習者の実践的日本語力の向上に寄与すると考えられる。

本研究では「はい」を中心にその機能を考えるが、従来からの応答詞として捉える考え方を批判的に検証し、談話管理の観点からみた役割が重要であることを述べる。また、「ええ」、「うん」と比較するうえで必要と思われる視点の置き方について考える。

2. 日本語教科書における「はい」、「ええ」、「うん」の扱い

「はい」「ええ」「うん」は、初級日本語教科書のきわめて初期に、いわゆる肯定応答詞として初出することが多い。この場合、「はい」と「いいえ」を同時に導入して‘Yes.’と‘No.’と同義であるというように説明される。

「ええ」も「はい」に伴って導入され、「うん」は友人同士の会話例が多い教科書で多く扱われる傾向がある。「はい」と「ええ」、「うん」の違いはフォーマリティあるいは丁寧度の差として説明され、「はい」が最もフォーマル/丁寧で、「うん」がインフォーマル/くだけた表現で、「ええ」はその中間に位置する、というのが一般的な見解である。

この3語はまた、あいづち詞としても導入される。堀口(1997)は代表的な日本語教科書8種で扱われているあいづちの種類を調査しているが、8教科書の会話例の中で最も多く使われていたのが「ええ」(112回)であった。また「はい」(60回)は3番目、「うん」(47回)は4番目に多く現れるあいづちであった(2番目は「そうですか」)。したがって、これら3語は代表的なあいづち詞として紹介されることが多いが、その3語の差は、やはりフォーマリティや丁寧度の差として説明されている。

この3語、とくに「はい」は、肯定応答詞、あいづち詞以外の用法も多いのだが、それを指摘している教科書は非常に少ない。堀口(1997)と同じ8教科書を使って調べたところ、物を人に差し出すときに使う「はい」や、呼び止められたときの返事としての「はい」が扱われている程度であった。

3. 談話管理の観点からみた「はい」、「ええ」、「うん」

3-1. 学習者に認識されていない「はい」の例

会話参加者は談話の構造や進行具合をフィードバックしながら先に進むが、そこには参加者間の相互の協力がみられなければならない。「参加者が相互に協力し合って談話を管理している」という考えから会話の進行をみると、「はい」、「ええ」、「うん」などのディスコース・マーカ―(談話標識)がたいへん重要な役割を果たしていることに気づく。これらのマーカ―の適切な使用なくしては、会話は頓挫してしまう。以下は、電話会話において学習者の「はい」の使用がうまく機能しなかったため、会話がスム

ーズに流れなかった実例である。

<例1>電話の終結部 A:日本人のかけ手 B:学習者の受け手 (岡本,吉野(1997)より^{注1})

1 A:合わせていっしょに見ていただきたいんですね

2 B:あー

3 A:はい

4 B:はい

5 A:え ですからその二つをあのお待ちしますので

6 B:はい

7 A:よろしくお願ひします

8 B:こちらこそ

9 A:はい (笑)

それでは明日の、ま、夜になると思います一けれども、はい。

10 B:はい、はい

11 A:以上です

12 B:はい

13 A://はい、どうも失礼しました

14 B:失礼しまーす

この会話は、母語話者の日本人が学習者にした依頼の電話の終結部を文字化したものである。母語話者と学習者の会話がうまくかみ合わずに電話が終結できない状態が続いている。最終的には母語話者の明示的な表現で電話を打ち切る意思を表明し、相互の合意のもとに電話を終結させることができた。ここでは多数の「はい」が使用されているが(母語話者の「はい」には直線、学習者の「はい」には二重線の下線を引いた)、岡本・吉野(1997)もいうように、学習者の「はい」の使いかたに問題があり、依頼が済んで電話を切りたい母語学習者が困惑している様子が見える。母語話者は1Aで依頼の内容を全部述べて学習者の受諾を待ったが、2Bで「あー」という応答しかもらえなかった。そこで相手に話順を渡す働きのある「はい」を使って依頼の受諾を明示する応答(例えば「分かりました」など)を期待したが、4Bではまた「はい」のみの応答であった。そのため5Aでは「え ですから～お願ひします」と情報を付け加えて依頼の意味を強化させているが、6Bであいづちと考えられるような「はい」をもらったあと、8Bで「こちらこそ」と応答されるのみで、依頼の受諾を明確にもらえず、電話の終結ができない。母語話者は9Aで「はい」といって苦笑せざるを得ず、「それでは～」と依頼事項のさらなる情報を出して相手の受諾表現を待つが、10Bでも「はい、はい」が得られたのみであった。そこで母語話者は最後の手段として11A「以上です」を発話して自力で会話を終結に向かわせることとなる。

学習者の「はい」の使い方をみると、「はい」が‘yes’の意味の肯定応答詞、あるいは‘ok’(受諾の意味の)、あいづちとしては、認識されていることがわかる。しかし、「はい」が単独では‘yes’や‘ok’の意味を担うことはむしろ少ないこと、談話進行のための重要なマーカーとして機能していることなどに関しては、認識がないことが分かる。この会話の場合、4B、6B、10Bの「はい」はそれだけでは受諾の意味を伝えることができず、母語話者にはあいづち、あるいは意図を測りかねるあいまいな表現に聞こえている。いっぽう母語話者は、(学習者が依頼を受諾したことはある程度推測できているものの)この場の状況の言語的不明瞭さを解消し学習者の明確な受諾を取りつけようと、「はい」を多用している。例えば3Aや9Aの最後の「はい」は話順を渡して相手に明示的な受諾を表明するチャンスを与えている。また、9Aではそれまでのやりとりを一区切りさせて新たな情報を導入している。このような細かい使い分けを母語話者は自然に行なっているが、学習者にはそれが理解できずに会話が進行し、母語話

者の「以上です」につながったわけである。

3-2. 発話の順番受け渡しの「はい」

会話におけるディスコース・マーカーとしての「はい」の例を、もうひとつみてみよう。

<例2> テニスの試合TV中継 A:アナウンサー B:解説者

1A: 立ちあがり、グラフがですね、いったんベンチに戻らずに、そのままサービスの、練習をしたままはいつてきました

2B: はい。あの今大会、あのこういうシーンよく見ました

3A: はい

4B: はい。やはりあの、ま自分からサービスをはじめるといふ、そういうことも…

<例2>はテニスのテレビ中継だが、1Aでアナウンサーが選手の様子を視聴者に伝えるとともに解説者にはこのことに関するコメントを求めている。このように平叙文で対話者のコメントを引き出す手法は、スポーツ中継やインタビューで多用される。これに対して解説者は、2Bで「はい」と受け、アナウンサーの平叙文をコメント要求と受け取ったこと、それに対して返答をする用意があることを伝えている。このような「はい」は役割関係が明確な会話に現われやすい。次にアナウンサーは2Bの解説者のコメントを聞いた後、<先を続けて>という意味のあいづちと考えられる「はい」を3Aで出して話順を渡している。そこで解説者はうながされるように4Bで「はい」を出し、話順を受け取って話をさらに進める姿勢を明らかにしている。このような「発話の順番受け渡し」(話順の渡しと受け取り)として「はい」は談話進行上たいへん重要な役割を演じている。ちなみに、談話管理においてみられるディスコース・マーカーのなかに「あいづち」も含まれるというのが筆者の考えである。本稿でこれまで「あいづち」を談話管理とは切り離れた所で述べてきたのは、従来「あいづち詞」は日本語に顕著にみられる言語現象として独立して語られることが多かったため、本稿では「はい」の談話管理的役割を強調するという目的のため「あいづち」を分けて扱ってきた。

3-3. リズムとりの「はい」

次は朝の主婦向けTV番組からとったものである。この冒頭部では女性アナウンサーがメインスピーカーとして視聴者に向かって話しかけている。

<例3>テレビ「生活ほっとモーニング」開始部 (F:女性アナウンサー M:男性アナウンサー)

1F: おはよう//ございます

2M: おはようございます

3F: 9月14日月曜日の生活ほっとモーニングです

4M: はい

5F: きのは日曜でした=あ//したはお休みで一す

6M: うん はい^{注2}

7F: という//ことで、なーに今週は1日多く夫が家にいるじゃないのと、

8M: {フフフ} (笑った後女性アナをちらっと睨む)

9F: こう思っている方いると思います

10M: はい

まず1Fの女性アナウンサーの挨拶に重なるようにして、2Mで男性アナウンサーが視聴者に挨拶をしている。したがって二人のアナウンサーは1F、2Mで視聴者に向かって話していることになる。女性

アナウンサーは 3F 以降もつねに視聴者に向かって話しているが、男性アナウンサーのほうはどうだろうか。4M から一貫して、対面会話においては「あいづち」と受け取られる「はい」や「うん」を連発しているが、自分に向けられていない発話に対して発する言葉も「あいづち」としていいものだろうか。少なくともこれまでの「あいづち」の定義は会話の相手に対して打たれることを想定していた。しかしここでは、両アナウンサーの話しかける相手は視聴者であるにもかかわらず「あいづち」のような「はい」や「うん」が打たれている。ここは「あいづち」の機能のひとつ、「聞いているという合図」というより、メインスピーカーのいっていることを支持していることの合図(あるいは援護射撃)や、リズムとりとして機能しているとみたほうが自然ではないだろうか。

4. 「はい」のさまざまな機能

このようにみていくと、これらのディスコース・マーカ、とくに「はい」の機能は実に多様であることが分かり、その多様性のなかから根源的な特徴を抽出することはにわかにはできそうもない。

そこでまず考察の手始めに、これまでに言及されている「はい」の機能に筆者自身があらたに認定したものをまとめてみることにした。以下に 17 種類「はい」を特徴を提示する。例文は、奥津 (1989)、沖 (1994)、石井 (1997) から流用したものを含む。

① Yes-No 疑問文に対する応答

a: 明日、いらっしゃいますか

b: はい

② 確認

a: 来年太郎君は一年生ですね (~だろう / ではないですか)

b: はい

③ 要求に対する了解

a: これを田中さんに渡してください

b: はい

④ 呼びかけに対する返事

a: 鈴木さん

b: はい

(電話の開始部で)

a: もしもし

b: はい

⑤ 共同で行う行動のスタートの合図

(皆で何かを持ち上げている) いち、にいの、さん、はい

⑥ あいので

a: それでは、次をみてもらうと、

b: はい

a: 分かります、思うのですが。

⑦ 「そうですか」に対する応答

a:きのう、電話で予約をしたものですが

b:あ、そうですか

a:はい

<⑥と⑦はどちらも「あいづち」という考え方もできる>

⑧「そうですか」の先取り応答

(店員が商品をお客に勧める場面で)こちらがよろしゅうございます。はい

<以下のようにaがbの「そうです」を先取りしてそれに応答したとも考えられる>

a:こちらがよろしゅうございます

b:そうですか

a:はい

⑨何かを提示する場面

(箱入りのケーキを出しながら)はい、おみやげ

⑩行動指示をする場面

(映画の開始にあたって)はい、スタート

(看護婦が病人に)はい、体温測って

(牛や馬に対して)はい、どうどう

⑪中止の合図

(生徒が作業を続けているときベルの音がして)はい、じゃあ止めてください

⑫話し相手のターンが終わったことを示す合図

(授業でa:生徒、b:教師、c:司会の生徒)

a:わたしは「弱み」というところに線を引きました

b:はい

c:Oさん

⑬注意喚起

(教室で騒いでいる生徒に)はい、はい、Mさん、はい、Tさん、Kさん、はい、お願いします。^{注3}

⑭相手のコメント要求指標の認知と了承

⑮コメント続行要求

⑯コメント終了の意図表明

⑰リズムとり

5. 「はい」の根源的意味

5-1. 「はい」は応答詞か

「はい」の基本的働きを追求しようとするとき、これまでの固定観念を覆して考える必要性を感じる。「はい」はこれまで肯定応答詞として位置づけられ「ええ」や「うん」と同義語のように考えられてきたが、果たしてそのような分類が適切であろうか。前節のリストを見れば分かるように、「はい」がもつ機能の多くを「ええ」や「うん」は担えない。もちろん「ええ」や「うん」のもつ機能を「はい」が担えないこと

もあるが、それほど多くはない。「ええ」や「うん」のほうが応答詞としての役割が強く、「はい」はそのような働きはむしろ付加的なものなのではないだろうか。

品詞論では「はい」、「ええ」、「うん」は応答詞として位置づけられることが多いが、品詞としての分類においても所属が一定していない。そもそも、これらの語は品詞としての位置づけが難しい。ものごとには一般に「その他」という、分類できにくい雑多なものが存在するが、「はい」、「ええ」、「うん」はその最たるものであろう。名詞、動詞、副詞などのように定義分類してどこにも入れずに残っていくものを集めて、その他とする代わりにこれまで幾つかの名称が与えられた。以下は明治期から試みられているいくつかの分類方法である。現在では3. が最も一般的なようである。

1. 感動詞（間投詞）、応答詞（応答、呼びかけ）
2. 応答詞＝応答詞、感動詞、呼びかけ詞
3. 感動詞＝感動詞（語）、呼びかけ詞（語）、応答詞（語）

このように分類が確定しないところをみても分かるように、感動詞、間投詞、応答詞の性質には連続性がある。感動詞はもともと意識未分明な原初的な声の発現であったろう。そしてこれらの語に見出せる共通点を考えると、「単独で文を形成できる」や「人間の情念やコミュニケーションの根源的なところに位置することば」ということではないだろうか。応答詞や感動詞、間投詞という区分はそもそも、西欧文法を導入した明治に‘interjection’を念頭に便宜的につけた名称であるといわれている（山口,1988）。そうであればなおさらのこと、英語の‘Yes’や‘No’と類似の概念と考えるのはかなり危険なのではないだろうか。因みに、英語では上記の2語は副詞というカテゴリーに分類されている。

5-2. 「はい」の肯定・否定の度合い

フランス（1988）は「はい」や「いいえ」にはもともと肯定・否定という強い意味があるのではなく、両対話者間の一致ないし不一致を表している、つまり統語論的機能より談話を進行させる機能を果たしている、と考えている。日向（1980）も「はい」は相手の発話に対する敬意の伴う認知応答であるといっている（下線筆者）が、これらは肯定・否定が第一義的意味ではないという主張である。

<例4>は沖（1994）から引用したものだが、ひとつの発話行為の達成に「はい」系と「いいえ」系のどちらもが使える、肯定・否定の意味を明確に担ったことばではないことが分かる。

- <例4> 1) a: ごめんなさい。
b: ウン、いいんだよ。
- 2) a: ごめんなさい。
b: イヤ、いいんだよ。

Yes-No 疑問文への応答発話が「はい」のみで自然に完結すると感じられるものは驚くほど少ない。このことから、「はい」の基本的機能は肯定・否定とは違うところにあると考えられる。

5-3. 「はい」のリズム性

古い文献や方言に現れる「はい」系統の言葉は、お囃子やあいの手といった、いわば調子とり（リズムとり）の役割を果たしているものがある。例えば民謡でよく使われる「はい、はい」といった合いの手、餅つきなど共同作業の際に合図として使われる「はい」などは、協調性や協力性を表現したリズム取りの役割が強く、返事としての応答詞的役割はない。

①民謡の「はい、はい」：合いの手

②餅つきの「はい」：合いの手、リズムとり（「べったん」－「はい」、「べったん」－「はい」が進むが、「はい」は「おっ」や「ほい」、「こりゃ」「どっこい」などに置きかえることができる）

5-4. 日本語会話の共話性

喜多（1996）では self-contextualization、共話など、日本語の会話において相手と話すリズムの大切さ、一定のリズムパターンの協力保持の重要性をあげている。そしてそれが日本語の会話ではあいづちの多用、頻繁な頭のふりなどを生み出しているといっている。この研究はあいづちと頭ふりに関する研究であったため、その他の要素には触れていないが、リズムパターンの協力保持が重要という記述から、あいづちという定義を超えたディスコース・マーカ―が日本語会話には大きな役割を果たしていることを十分にうかがわせる記述である。

6. 「はい」、「ええ」、「うん」再考

これまで「はい」を中心にみてきて、「ええ」、「うん」との違いにはほとんど振れていない。Angeles et al.(2000)の調査によると「はい」の機能は「ええ」、「うん」をはるかに上回る多様性をもっている(表1)。

表1. 「はい」、「ええ」、「うん」の機能の違い (Angeles et al. (2000:81) より)

| | Hai | Ee | Un |
|---|-----|----|----|
| A: Positive response to YNQ | O | O | O |
| B: Back-channel | O | O | O |
| C: Acknowledgement of having heard before answering | O | O | O |
| D: Self-confirming | O | O | O |
| E: Response to a suggestion | O | O | O |
| F: Response to a command or a strong request | O | X | O |
| G: Attention-getting | O | X | X |
| H: Response to attention-getting | O | X | X |
| I: Presentation/submission | O | X | X |
| J: Roll call | O | X | X |
| K: Use as a repeated back-channel to cut off | O | X | X |

しかし、これだけでは「はい」の機能も、「ええ」や「うん」との機能も明確にされているとはいいがたい。今後は4. で提示した「はい」の17の機能を再考し、Angelesらの研究結果と比較し、それぞれの語の根源にある機能を考える必要がある。その際、Angelesらの考察では十分に注意が払われていない以下のような視点を導入する必要があり、暫定的にはある程度の傾向を予想することができる。

- ・丁寧さのレベル：「はい」、「ええ」>「うん」
- ・「相手めあて」か「自分めあて」か：「はい」、「ええ」vs.「うん」
- ・談話管理的性格：「はい」>「うん」「ええ」

「はい」、「ええ」、「うん」は屑籠にいれざるを得ないような雑多なことばかもしれないが、意外に奥が深い仕事をしている。これらの働きを探ることで、日本人にとって「話す」という行為がどのような意味をもっているのかの一端が見えてくるかもしれない、という予感がするのである。

【注】

1. 本稿の目的に添って下線など変更した箇所がある。
2. 「はい」と「はい」は音声上聞き分けが難しいことがある。ここでも「はい」は「はい」の「い」の部分の軽く発音されたための違いであると考え、考察上は「はい」と同等に扱った。
3. 石井(1997)では「たたみかけるような『はい』で子供達の不満を封じ込める」とあるが、それは注意喚起の結果として出てくることと考えた。

【参考文献】

- Angels, J. et al(2000) 'Japanese responses hai, ee, and un.' *Language and Communication*, 20.
- フランス・ドルヌ(1988)「フランス語におけるあいづちの機能」『日本語学』Vol.7 12月号 明示書院
- 日向茂男(1980)「談話における『はい』と『ええ』の機能」『国立国語研究所報告』65 秀英出版
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 池上禎造(1952)「『はい』と『いいえ』」『国語国文』第21巻 第8号(217号) 京都大学国語国文学研究室
- 石井恵理子(1997)「教室談話の複数の文脈」『日本語学』Vol.16 3月号 明治書院
- 喜多壮太郎(1996)「あいづちとうなづきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』Vol.15 1月号 明治書院
- 北川千里(1977)「『はい』と『ええ』」『日本語教育』33号 日本語教育学会
- 北原保雄(1981)『日本語の文法』(『日本語の世界』第6巻) 中央公論社
- 三宅和子(1998)「談話における『はい』の機能」東洋大学短期大学紀要第30号
- 三宅和子(1999)「『はい』の機能を考える」第44回 関東日本語談話会発表資料
- 森重敏(1952)「応答詞とその分化」『国語国文』第21巻 第2号(211号) 京都大学国語国文学研究室
- 岡本、吉野(1997)「電話会話における談話管理」『世界の日本語教育』Vol.7 国際交流基金日本語国際センター
- 沖久雄(1991)「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』Vol.12 4月号 明治書院
- 沖久雄(1994)「チャレンジコーナー」『月刊言語』3月号～8月号 明治書院
- 奥津敬一郎(1989)「応答詞『はい』と『いいえ』の機能」『日本語学』Vol.8 8月号 明治書院
- 山口亮二(1988)「感動詞・間投詞・応答詞」『研究資料日本語文法』第4巻『修飾句・独立句編』(1984年初版) 明治書院